

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：43922

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520486

研究課題名(和文)カイケ語の記述調査、及びチベット語との言語接触を中心とする歴史言語学的研究

研究課題名(英文)Description of the Kaike language and investigation of its relationship to the Tibetan language

研究代表者

本田 伊早夫 (Honda, Isao)

名古屋短期大学・英語コミュニケーション学科・教授

研究者番号：10269681

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ネパールでの現地調査によりネパール北西部ドルパ郡ティチュロン地方で話されている二言語、カイケ語とチベット語ティチュロン方言(どちらもチベット=ビルマ語族に含まれる言語)それぞれの記述研究を進展させた。また、両者の間の言語接触の結果と思われる痕跡がそれぞれの言語にどの程度存在するか、お互いが他方にどのような影響と変化をもたらしたか解明を進めると共に、カイケ語、チベット語とタマン諸語との歴史的関係、及びカイケ語とその他のヒマラヤ地域の言語との間の歴史的関係についての理解を深めることができた。

研究成果の概要(英文)：In this project, field research was conducted several times in Nepal to investigate a language called Kaike and the Tichyurong dialect of the Tibetan language, both of which belong to the Tibeto-Burman language group and are spoken in an area called Tichyurong (the Dolpa district, Nepal). Based on the data collected during the field trips, the description on these two languages was significantly progressed, and a much greater understanding has developed of how much evidence and traces of their language contact exist in the languages, and of what kinds of influence and change one has brought on the other. In addition, the project made an important contribution to a deeper and clearer understanding of the relation between Kaike, Tibetan, and Tamangic languages.

研究分野：言語学

 キーワード：歴史言語学 チベット=ビルマ諸語 カイケ語 チベット語 言語系統 言語接触 タマン諸語 ヒマ  
ラヤ諸語

### 1. 研究開始当初の背景

チベット語はアジア中央部の広大な地域に分布し、100を超える方言を有する大言語であるが、チベット仏教と共に周辺諸民族、諸言語に与えてきた歴史的影響力は計り知れず、その歴史の解明はチベット・ビルマ諸言語の歴史、及び中央ユーラシアにおける民族史をより良く理解する上で極めて重要である。また、その理解の為にはチベット語だけでなく、周辺諸言語の歴史と、それらの言語とチベット語との間の歴史的関係の解明が不可欠である。

本研究代表者はこれまで、チベット語と系統的に最も近い言語(群)と考えられるタマン諸語とカイク語の調査に従事し、それまでほとんど未記述・未調査であったいくつかのタマン諸語やカイク語の記述を進めると共に、チベット語がこれらの言語とどのような歴史的関係を持ってきたか、その解明に向けたデータ収集とその分析を行ってきた。それにより、カイク語と最も系統的に近いのはタマン諸語であろうという従来からの推察の蓋然性が高まった反面、カイク語とタマン諸語、チベット語との系統関係はどれも即座に確立できるほど近いものではないということも明らかになってきた。また、カイク語の中にはチベット語からの借用ではないかと思われる語彙が大量に存在するが、カイク語とチベット語の歴史的関係を探る上で、これらのどの部分が、カイク語と同様に現在、ネパール、ドルパ郡ティチュロン地方で話されているチベット語ティチュロン方言からの直接の借用であるのか、どの部分がそれ以前にチベット語と接触した痕跡であるのか等を明らかにすることの重要性を認識するに至った。

その一方、本研究代表者によるティチュロン方言の予備的調査により、この方言の中にカイク語からの借用ではないかと思われる語彙がかなり存在することもわかってきた。チベット系言語圏、特にネパール北部のヒマラヤ地域では、歴史的にチベット語が社会的に威信の高い上層語であった為、チベット語から非チベット語へは大量の語彙の流入があったのに対し、非チベット語からチベット語への語彙の流入はかなり限られているのが一般的である中、ティチュロン地方におけるカイク語とティチュロン方言の言語接触は興味深い事例を提供してくれる可能性を秘めているということも本研究を着想した背景の一つである。

更に、チベット語ティチュロン方言はそれまで言語調査が全くされてこなかった未調査・未記述言語であり、その記述調査の緊急性と重要性故、以前から調査の必要性を強く感じていたが、今回、調査環境も整い、本格的な調査に乗り出すこととした。

### 2. 研究の目的

本研究の主な目的は以下の通り。

(1) カイク語の言語調査・記述を更に進め、より精密且つ包括的な言語データを構築すること。特に、チベット語ティチュロン方言や他の現代チベット語中央方言、タマン諸語との間にどのような歴史的関係があったのかを探る上で重要な音韻と音調について、更に詳細な記述をめざす。また、カイク語の文法書、辞書の公刊に向けて、執筆作業を進ませる。

(2) チベット語ティチュロン方言の調査を本格的に開始し、言語全体の体系の概略的記述を研究期間中にできるだけ進める。まずは、語彙の収集を進める中で、音韻体系を確定させ、その記述をほぼ完了させると共に、基本的な文法を把握し、チベット語諸方言の中で歴史的、類型論的位置づけについて、その概略を把握する。

(3) 前述(2)によって得られたチベット語ティチュロン方言の語彙と、古チベット語や現代チベット語諸方言の語彙を比較・分析することにより、同源の同定作業等を行い、両者の間にどのような対応関係がどのように見いだされるか明らかにする。

(4) カイク語とチベット語ティチュロン方言の語彙を分析し、ティチュロン方言の中にカイク語からの借用と思われる語彙がどれ程存在するか、借用の際どのような音韻変化などがあったか等、研究を進める。

(5) カイク語の中に見られるチベット語からの借用と思われる語彙が、どの時代、どの方言からのものであるか、分析作業を進める。

(6) カイク語とその周辺のチベット・ビルマ系諸言語、特に隣接するタマン諸語とカム語(Kham)の語彙比較から、これらの諸言語へのカイク語からの借用、及びカイク語への借用の状況を探り、相互の歴史的関係についての理解を深める。

(7) ティチュロン地方の異なる村々の住民、あるいはその出身者から聞き取りを行い、この地方の社会、伝統文化への理解を深める。またその目的と、言語構造のより良い理解の為、カイク語、チベット語ティチュロン方言双方において、できるだけ多くのテキスト(伝承・昔話や、口頭による伝統的文化・社会等についての解説・説明などを書写したものを)を収集する。

(8) カイク語の音調体系を他のチベット・ビルマ諸語(特にタマン諸語とチベット語)のそれと比較しながら、その音調発生のメカニズムについての仮説の構築をめざす。

### 3. 研究の方法

(1) カイク語、及びチベット語ティチュロン方言の言語記述調査の為、ネパール国内でのフィールド調査を継続的に実施した。調査では母語話者の協力のもと、語彙収集、文例収集、テキスト収集と、それに伴い音韻、音調、形態、文法など言語構造全般の調査に従事した。各回の現地調査で得たデータは、持ち帰り分析整理し、次回以降の調査で繰り返し確

認、仮説を検証するという形で記述を進めていった。

(2) このように検証しつつ蓄積していったデータと、本研究代表者がこれまでに収集したタマン語群諸語についてのデータ、及びその他の言語に関する先行研究をベースに、チベット語、タマン語群諸語、カイケ語の歴史的関係（系統関係と言語接触の状況等）及びチベット語ティチュロン方言のチベット語の中での位置づけ（古チベット語や現代諸方言との関係）、カイケ語とチベット語ティチュロン方言との歴史的関係などの探究に従事した。

#### 4. 研究成果

(1) カイケ語について、音韻、音調、形態、文法などについての理解と語彙収集が更に進み、言語構造全般の記述を着実に進展させることができた。特に、音声面では音調パターンについて、複数の母語話者との調査により、話者によるバリエーションはないか等、より確実なデータを収集することができた。また文法面では、格表示接辞の使用、使役構文、名詞化と関係節、動詞に付く時制・アスペクト・法などを表す接辞の使用など、これまで未だ調査と記述が不十分であると感じられていた点について、調査と記述が進んだことは大きな成果であった。こうした成果により、カイケ語の文法書、辞書、テキスト集等の刊行に向けて更に準備を進めることができた。本研究代表者によるカイケ語の（音声面を含む）文法に関する調査・研究の成果は国際学会での学会発表がほとんどで、これまで論文としての発表はほとんどしていないが、ようやく言語全体の体系について理解・把握、確認・検証がほぼ完了したと言えるレベルに達したと考えており、現在、カイケ語の概要についての論文と、音韻・音調体系の全体を記述した論文の出版に向けた準備を進めている。また、過去に学会で発表したカイケ語文法に関してのいくつかの学会発表に関して、今回の研究で得られた成果に基づきその内容を修正し、論文として発表すべく今後準備していく予定である。

(2) チベット語ティチュロン方言については、本研究で初めて本格的に調査を開始した段階であり、まだまだ未調査、未記述である部分が多く、言語全体の体系を把握できたとは言えないが、音韻・音調体系に関してはほぼ概要を確定させることができた。今後はより多くの語彙を収集し、把握している体系、パターンに例外的なものが無いか、話者によるバリエーションがどれだけあるかなど検証を進め、より正確で確かな記述をしていくことが必要となってくる。文法面においても未だ基本的なところが確認・把握できたに過ぎないが、ほぼ予定していた量、ペースで調査、記述を進展させることができた。また、収集できた語彙の数もほぼ予定通り、あるいはそれ以上の成果を上げることができた。

(3) カイケ語が話されている村々と、チベット語ティチュロン方言が話されている村々の伝統文化（伝承・昔話、習慣、行事等々）と社会生活・構造などにつき、それぞれの言語でのテキストを多数収集すると共に、それらについて母語話者から聞き取り調査を行ったことで、言語だけでなく、文化、社会についての知識を拡げ、理解を深めることができた。特に、チベット語ティチュロン方言が話されている村々の伝統文化、行事、習慣、伝承等については文化人類学の分野においてもこれまで全く知られていなかったが、未だ包括的とは言えないまでもかなり詳細に知ることができたことは大きな収穫であった。また、これにより、カイケ語が話されている村々とチベット語ティチュロン方言が話されている村々の間でどれだけ通常の社会生活や宗教的儀式などの伝統的行事が共に行われているのか、別々に行われてきたのかといったこともかなりの程度把握することができ、今後、カイケ語とチベット語ティチュロン方言の間の言語接触について推察、議論する上での大きな根拠資料を得ることができた。

(4) 前述の通り、チベット語ティチュロン方言の音韻・音調体系に関してはほぼ確定させることができたので、それをベースに、古チベット語、及びチベット南部・ネパールとの国境付近に分布する現代チベット語中央諸方言の語彙との比較対照作業を進め、それぞれの言語、方言との音韻・音調対応関係もほぼ特定することができた。チベット語ティチュロン方言は、現代チベット語中央諸方言とかなり共通する音韻、音調パターンを持つことを確認した一方、わずかではあるが、重要なかなり特有の音韻、音調パターンが存在することも判明した。とは言え、未だ完全に記述が完了したというわけではなく、確認が必要な項目を残しており、研究期間中での成果発表には至らなかった。今後、これらの点についての補足調査を経た上で、チベット語ティチュロン方言のチベット古語、現代中央諸方言との歴史的関係等に関する論文と、ティチュロン方言とカイケ語との間の言語接触に関する論文発表に向けた準備を進めていく予定である。後者に関しては、2011年9月神戸で開催された「The 17th Himalayan Languages Symposium」にて「A preliminary investigation into Kaike tones and a lexical comparison between Kaike, Tamangic, and Tibetan」として発表した学会発表の内容を修正しながら進めていくことになる。カイケ語とティチュロン方言との間の語彙借用の状況については、事前の予備調査からの推測通り、ティチュロン方言の中にカイケ語からと思われるかなり大量の語彙が存在していることが確認できた。特に、動詞の中にそういう語彙が大量に見いだされるという点が特徴的な点として指摘できる。

(5) カイケ語とタマン諸語、チベット語との

歴史的関係、及び、カイケ語とその他のヒマラヤ地域の言語との間の歴史的関係についての探求の為、更にそれぞれの言語間の語彙比較等を進め、その成果の一部を 2013 年 9 月オーストラリア・キャンベラで開催された国際学会「The 19th Himalayan Languages Symposium」にて、後述 5. の「学会発表」1 ) として発表した。

(6) カイケ語、チベット語、タマン諸語との間の系統関係を分析する中で、これまでのタマン諸語文法に関する調査・分析が不十分であり、更なる調査が必要であると判断される文法項目が出て来た為、いくつかのタマン諸語・方言の調査を行い、これまでに得ていたデータの確認や新しいデータの収集と分析を行った。こうした調査によって得られたデータは、チベット語、カイケ語とタマン諸語間の関係を探求する上で有意義な成果となった。その成果の一部は、研究論文(後述 5. の「雑誌論文」1 )、2 )) や、2015 年 8 月、アメリカ、サンタ・バーバラで開催された国際学会「The 48th International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics」にて後述 5. の「学会発表」2 ) として発表した。

#### 5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

1) 本田伊早夫「セケ語の名詞句構造と名詞化」池田巧(編)『チベット=ビルマと周辺諸語の文法現象 3 : 名詞句の構造』京都大学人文科学研究所: 京都(査読無) 2016.3.

2) 本田伊早夫「セケ語の節と文」澤田英夫(編)『チベット=ビルマ系言語の文法現象 2 : 文の特徴付けと下位分類』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所: 東京 2013.3. (査読無)

3) Honda, Isao. “Internal diversity in the Tamangic lexicon.” In: Thomas Owen-Smith and Nathan Hill (ed.), *Trans-Himalayan Linguistics*, 131-153. Berlin: Mouton de Gruyter. 2013.12. (査読有)

〔学会発表〕(計 2 件)

1) Honda, Isao. “The possessive/nominalizer *-la(ŋ)* in Tamangic (Nepal): Its link to genitives, complementizers, and finite verb suffixes.” The 48th International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics, 2015.8. University of California: Santa Barbara, California, U.S.A.

2) Honda, Isao. “Preliminary notes on the language of Kaike and its relation to other Himalayan languages.” The 19th Himalayan Languages Symposium, 2013.9. Australian National University, Canberra, Australia.

#### 6 . 研究組織

(1) 研究代表者

本田 伊早夫 (HONDA ISAO)  
名古屋短期大学・英語コミュニケーション  
学科・教授  
研究者番号: 10269681